

59. 淀川流域の文化

江戸時代まで、いや鉄道が通じるまでは、淀川は交通の幹線。その幹線沿いに発達した摂津市域では、淀川は生活文化の上にいろいろ影をおとしていた。

◆舟を持って運送業

淀川は交通の幹線であったころ、ゴキウ、鳥飼上、柱本はちょっとした港だった。

鳥飼中の H 氏の祖父は幕末生まれの人。舟を 1 隻もって運送業をしていた。父と 2 代、櫓で漕ぐ時代の船頭さんである。大阪へ売る商品といえば、米にむしろに縄、むしろは村中からチギで計って買い集めた。米やむしろを積んで大阪に持って行った。

帰りは松屋町でお菓子を買ってきて、頼まれた人のもとに届ける。そのころ醤油センベイとか栗おこしなんかが入っていた。農家はそんな缶ごとお菓子を買って入っていた。船頭はあちらこちらで頼まれたことを帳面に付けて、買いつけては配って歩いた。

◆粋な姿でもてる

船頭の服装は、上はアツシ。アツシはアイヌの人たちの着るもので、法被（はっぴ）を長くしたようなもの。帯でしめて決め、下はパッチをはいた。アツシは常用とよそ行き用があり、大阪へ出る時はよそ行きを着ていた。粋な姿だった。

財布は布製の大きなものだった。幅 20cm、長さ 30cm で 3 段になっていて、伝票のようなものも分けて入れていた。長い紐でぐるぐる巻いていた。

村でちょっとした人気者であったが、また女にもよくもてた。大阪新町の女にあげはてて、ついに家も田畑も売ってしまった。

◆鉄道に押される

京阪電車ができた。そのうち新京阪（阪急電鉄の通称）も開通した。この頃の電車は間に貨車もつないでおり、陸上輸送の時代がやってきた。とくに京阪は守口・寝屋川・香里とつないで貨物輸送が多く、淀川の舟運は振るわなくなって船頭も廃業した。またそのころから、牛に引かせる荷車、馬力も陸上交通の担い手になってきた（鳥飼中、H 氏）。

◆淀川でつながる人脈

鳥飼上の K 氏の 4 代前、ひおじいさんの奥さんは京都の嵯峨から嫁入りしてきた人、鳥飼と京都・伏見・大阪八軒屋あたりとは何かにつけて人的交流が大きく、村でも長男以外の者は伏見や大阪に出て、そのまま居つくものもいたようで、田舎とはいっても土地に縛られた狭い世界に生きていたわけではなかった。こうしたことは、自分たちの記憶の中でもなおたどれる事が多い。今そうした事例の発掘と記録が急がれる（鳥飼上、K 氏）。

60. 帆かけ舟・蒸気船

淀川は京都・伏見と大阪をつなぐ昔の幹線交通路。淀川沿いの摂津市域は、農村といっても外に開けた世界だった。村の片隅の相撲取りのお墓、あれは何だろう。

◆帆かけ舟の時代

大正 5～6 年（1916～17）より以前は、帆かけ舟が通った（別府）。

帆かけ舟が江口の旧家を褒めた唄を歌って通った。女の人が川べりで洗濯していると、舟人が「おばちゃん、おちょちょみえとるぞー」とからかって通った（別府）。

◆蒸気船の登場

大正 5～6 年頃になると、ポンポンが 10 隻ほど引いてきた（別府）。

鳥飼の浜のところを蒸気船が上りも下りも貨物船を引いて通った。小学生だった大正末年の頃、泳いで蒸気船に飛び乗った。引き船の積み荷は茶色や紫の海草が多かった。寒天の材料だろうか（鳥飼八防）。

小学生だった昭和の初めの頃、蒸気船が石炭など積んだ船を引いて煙だして通った。伏見まで行くのだと聞いた。大きな波が寄せてきた（一津屋）。

◆航路の浚渫

蒸気の大輪船が団平船を 10 隻も 20 隻も引いていたが、砂州で座礁しないようジョウレン（鋤簾）で砂をよける仕事があった。航路の浚渫は小作のいい副業となった（一津屋）。

◆鳥飼上の蒸気寅

蒸気船の船長で“蒸気寅”と呼ばれた人がいた。蒸気船の船長はヤクザでないと勤まらない。淀川一帯を仕切っていた門真の砂子川親分の分かれで鳥飼上に一家を構え、村の青年を子分にして村にバクチを流行らせた。子分ではないが出入りする村人もあった。

蒸気寅の奥さんは、大きなイチョウの木の側の家で駄菓子屋をやっていた。夏姿になると刺青をしているのが見えた。子供は刺青見たさに駄菓子を買いにいった（鳥飼上）。

◆相撲を流行らせる

プロの相撲取りは現役を引退すると、ヤクザの元に寄宿して食わせてもらい、村の青年に相撲を指導した。昔は何も娯楽がなかったから、青年たちは夏になると相撲ばかりとっていた。親分は年に 1～2 回、勧進相撲を催してプロの相撲を呼んだり、素人の勝ち抜き戦をして金を取った。村にはセミプロのような強い人がいて、四股名ももっていた。

師匠役の元相撲取りが死ぬと、弟子の村人たちはお墓を建てる。だから相撲取りの墓はどこにもある。願生寺や味舌小学校のところにも残っている（鳥飼上、K 氏、H 氏）。